ドイツ帝国時代のベルリンの建築物

田中 辰明
お茶の水女子大学名誉教授・工博

はじめに

筆者の知人、上由美子さんの祖父が昭和の初期に欧州に業務出張した。そしてベルリンで当時の絵葉書を購入し帰国した。その絵葉書はそのまま保存され、上由美子さんにより保管されていた。第二次世界大戦末期にベルリンは連合国により、徹底的に破壊された。従って、この絵葉書に見る当時の建物やその位置が現在のものと異なるものが多い。上由美子さんの祖父が絵葉書を購入した時期は不明であるが、昭和元年(1926年)と想像される。その時期、ドイツはヴァイマール共和国時代(1919～1933年)であった。しかし絵葉書の建築物は全てドイツ帝国時代の建築物である。これら建築物について解説してみよう。

この絵葉書には1枚のイラスト(図1)が添付されていた。若者がトランクを下げているイラストで、これには「無事にベルリンに到着した！」という文字が入っている。ベルリンはプロイセン、ドイツ帝国の首都として発展を続けてきた。鉄鋼、化学工業を中心に工業化が進み、地方から沢山の労働者が職を求めてベルリンに出てきたのであった。初代ドイツ帝国皇帝となったヴィルヘルムⅠ世治世の時代である。

図1　うまくベルリンに到着した!

1．ドイツ帝国議会建物

ドイツ帝国議会建物を図2～図6に示す。この建物の建築設計者はPaul Wallotで、1884～94年に建設された。第二次世界大戦では連合国側の攻撃対象となり、大きな損傷を受けた。この建物は東西ドイツに分かれていた時代は西側のTiergarten地区に建っていた。西ドイツ(ドイツ連邦共和国)の首都はボンであったので、この建物は議会としては使用されず、ドイツの歴史を展示する博物館になっていた。1990年にベルリンの壁が崩壊し、東西ドイツが合併、統一されると大修理が行われ、1999年以降この建物を再度ドイツ連邦共和国議事堂として使用することが検討された。しかし、この建物は1933年にヒトラーが政権を取った直後に出火する事件があった。ヒトラーはこれを共産党による放火と決めつけ共産党議員の逮捕が行われ、ナチの飛躍に結び付けた。この建物はヒトラーも政治を行った建物であり、ドイツは再度議事堂として使用するにはかなりの気を遣っている。1995年から1999年にかけての大修理には旧敵国であった英国の建築家Norman Fosterに設計を委ねている。図2はドイツ帝国議会とビスマルク像である。ビスマルク(Otto Eduard Leopold von Bismarck Schönhausen, 1815-1898)はプロイセン王国首相(在職1862～1890年)、北ドイツ連邦首相(在職1867～1871年)、ドイツ帝国宰相(1871～1890年)を務めた。ドイツ統一を果たした中心人物であり、卓越した外交力を持ち鐵血宰相(独：Eiserne Kanzler)とも呼ばれた。ドイツを強大国に引き上げた人物であった。ビスマルク像は帝国議会建物の前に立っていたが、ヒトラー政権下の1838～1839年にかけてティアガルテン(Tiergarten)地区のグローサーシュテルン(Großer Stern)に移動された。ビスマルク像の下にあった6つの像は1958年以降行方不明である。図3は帝国議会建物の正門である。図4はドイツ帝国議会建物の正面正門である。図5は現在の帝国議会建物である。ドイツ帝国初代皇帝となった

図2　ドイツ帝国議会建物とビスマルク像

図3　ドイツ帝国議会建物正面

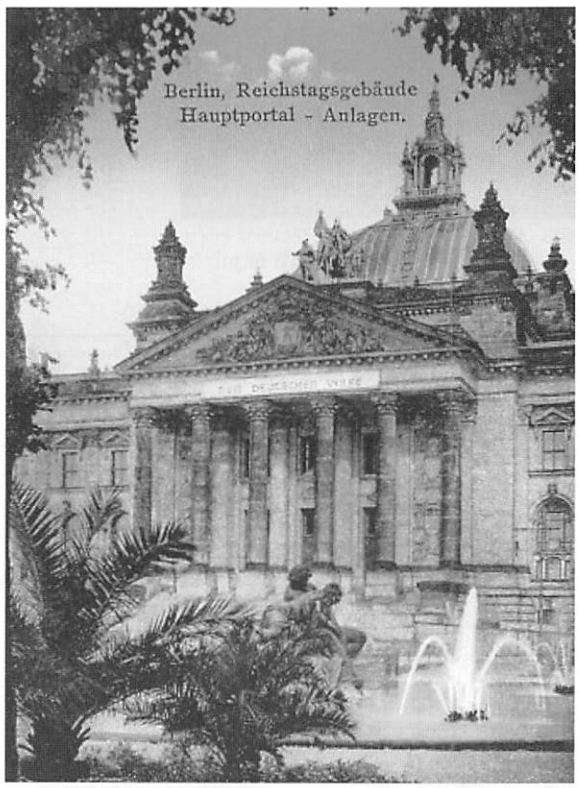

図4　ドイツ帝国議会建物正面正門

図5　現在の旧帝国議会建物（現在ドイツ連邦共和国議事堂）

図6　ドイツ帝国議会建物と戦勝記念塔

ヴィルヘルムⅠ世治世の時代である。英国の建築家フォスターにより大改修が行われ、ドイツ連邦共和国議事堂として使用されている。

図6は帝国議会建物と戦勝記念塔である。この戦勝記念塔はプロイセン王国がデンマークに戦勝したのを記念して1864年に建設された。塔の設計者はFriedrich Draleである。後に対オーストリア（1866年）、対フランス（1870-1871年）に勝利した記念も含まれるようになった。プロイセンがオーストリア、フランスに勝利したことにより、ヴィルヘルム１世は1871年にドイツ帝国初代皇帝になっている。この戴冠式はドイツでなく占領先のフランス、ヴェルサイユ宮殿鏡の間で行われた。この当時に活躍したのが前述のビスマルクであった。この絵葉書のように当初は、戦勝記念塔はドイツ帝国議会の正面に建っていた。塔の高さは60.5mであった。ヒトラー政権時代にこの塔はティアガルテン（Tiergarten）地区のグローサーシュテルン（Großer Stern）に移築され、国威発揚の為高さも67mになった。ドイツ帝国議会建物

図7　ドイツ帝国議会建物の前の国王広場(Königsplatz)に建っていた頃の戦勝記念塔(高さ 60.5 m)

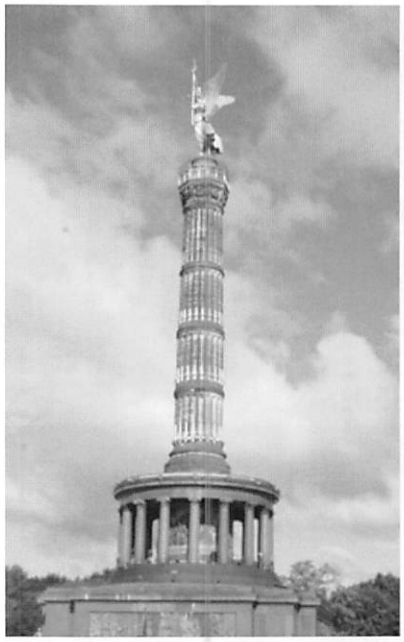

図8　現在ティアガルテン地区、グローサーシュテルンに建つ戦勝記念塔(高さ 67 m)

の正面に立っていた戦勝記念塔の絵葉書を図7に示す。この戦勝記念塔が建っていた場所は国王広場(Königsplatz)といったが、第二次世界大戦で破壊され、現在は共和国広場となり、ベルリン市民の憩いの場所になっている。図8は現在ティアガルテン地区に建つ戦勝記念塔、ジーゲスゾイレ(Siegessäule)である。

当時の帝国議会建物付近の地図を図9に示す。

現在のベルリンの都市計画の元はプロイセン王国の都市計画警察(Baupolizei)に所属していたジェームス・ホープレヒト(James Hobrecht)(1825-1902)により行われた。19世紀に行われた土地利用計画で、ホープレヒト計画と呼ばれている。ホープレヒトが強権を持って都市計画が行えたのもビスマルクの支持、後ろ盾があっての事であった。

1862年、約50年間の予定で、「ベルリン近郊土地利用計画」が決定された。この計画はベルリン市周辺を対象とするだけでなく、広域な範囲での空間的な地域計画も記述されていた。

図9の地図の右、中央にブランデンブルグ門がある。ブランデンブルグ門から帝国議会へ至る道路は当時ゾンマーシュトラーセ(Sommerstraße)と呼ばれていた。東西ベルリンに分かれていたころ、ここにベルリンの壁があった。この道路の東側が東ベルリンであった。この道

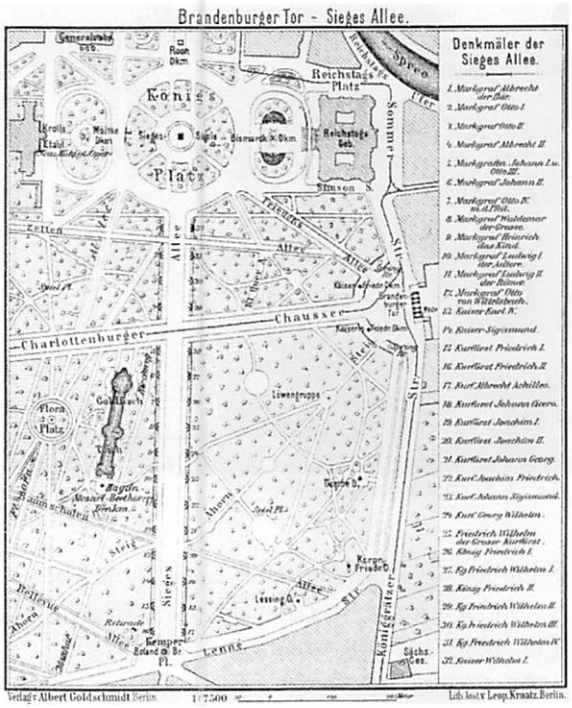

図9　当時のドイツ帝国議会付近の地図

路は現在エバートシュトラーセ(Ebertstraße)と名前を代えている。ブランデンブルグ門から西に延びる大道路はシャロッテンブルガーシャセー(Charlottenburger

図10　戦勝記念大道り(ジーゲスアレー、Siegesallee)

図11　ブランデンブルグ門

図12　現在のブランデンブルグ門

Chausse)と言った。この大道路は現在6月17日道路(Straße des 17. Juni)と呼ばれている。東西ベルリンに分かれていた1953年6月16日に東ベルリンの建設労働者が反政府抗議活動を起こした。この抗議活動参加者の数が増え、ついにソ連の戦車が翌日6月17日に出動し、鎮圧を行った。この間にデモ隊に多数の死傷者が出たが、人数は公表されなかった。この事件は1956年のハンガリー動乱、1968年のプラハの春事件の先駆けであった。西ベルリンはこれを東西ドイツ統一の希望の日とし、6月17日を休日とし、道路も「6月17日通り」と改称した。ベルリンの壁が崩れ、1990年10月3日に東西ドイツ統一が実現された。それ以来10月3日が「ドイツ統一の日」となり、6月17日の統一の日は消滅した。この地図にジーゲスアレー(Siegesallee. 戦勝記念大道路)という道がある。道路の両側にはプロイセンの選帝侯、国王、ドイツ帝国になってからの皇帝の胸像が並んでいた。それだけに第二次世界大戦では攻撃の目標となり、破壊された。この大道路は復旧されず、現在はティアガルテン(Tiergarten)の自然公園になっている。賑わっていた頃のジーゲスアレー(Siegsallee)の絵葉書が図10である。

2．ブランデンブルグ門

図9の地図の右にあるブランデンブルグ門の絵葉書が図11である。この門はCarl Gotthard Langhansの設計により、1788～91年にかけて建造された。フリードリッヒ・ヴィルヘルムII世の治政時代であった。この絵葉書はパリ広場(Pariseplatz)が写っている。旧東ベルリン側という事になる。現在のブランデンブルグ門が図12である。かってここに東西ベルリンを分ける壁があった事もあり、ベルリンの最も重要な観光スポットになっている。

3．ウンター・デン・リンデンの建物

この門から東側の大道路がベルリンの一番の繁華街で、重要建築物が多数存在するウンター・デン・リンデン(Unter den Linden)である。ウンター・デン・リンデンに沿った建築物を紹介していく。

図13がベルリンの弾薬庫である。市街戦に備えてベルリンの中心部に弾薬が蓄えられていた。この建物は現在屋上にあった彫刻物は撤去され、ドイツ歴史博物館になっている。建築設計は、Johann Amold Nering, Martin Grünberg, Andreas Schlüter, Jean de Bodt, Otto Häslerで、1695-1706年に建設された。フリードリッヒ1世の治政時代である。フリードリッヒ1世はプロイセンの東部だけを支配していたので、「プロイセン国王」とは名乗らず、「プロイセンの王」と呼ばれた。フリードリッヒ1世は東プロイセンのケーニヒスベルク(Königsberg)で戴冠式を行っている。ちなみにケーニヒスベルクは建築家ブルーノ・タウトの出身地である。

図14は大学である。ベルリンの帝国大学として、フリードリッヒ・ヴィルヘルムIII世の治政時代、1810年

図13　ベルリンの弾薬庫

図14　ベルリン大学

図15　現在のフンボルト大学

図16　ベルリン王宮と大選帝侯の像

に創立している。有名な学者が教授となり、有名人が多数学んだ。日本からも森鴎外、北里柴三郎他有名人多数が留学した。後にフンボルト大学と名前を変えた。ブルーノ・タウトの子息ハインリッヒ・タウトもここの教授となり、共産主義の理論を教授した。東西ドイツに分かれていた時代は思想統制、予算不足から、大学は疲弊した。しかし統一後予算も増え、ドイツのエクセレンス・イニティアティブ11校に選ばれ、再び復活を果たした。大学の正面に2階建てのバスが見える。2階建てのバスはロンドンよりもベルリンの方が早かったという説があるが、定かではない。図15は現在のフンボルト大学正門である。

図16はベルリン王宮である。王宮の前には大選帝侯(Der große Kurfürst)であったフリードリッヒ・ヴィルヘルム(1620〜1688)の騎馬像が建っている。フリードリッヒ・ヴィルヘルムは当時ポーランドの支配を受けていたプロイセン公国をポーランド支配から解放した人物である。フェールベリン(Fehrbelin)の戦いでスウェーデンに勝利し、後にドイツ帝国となっていくプロイセンの基礎を築いた人物である。この騎馬像は現在は旧西ベルリンにあるシャロッテンブルグ王宮(Schloß

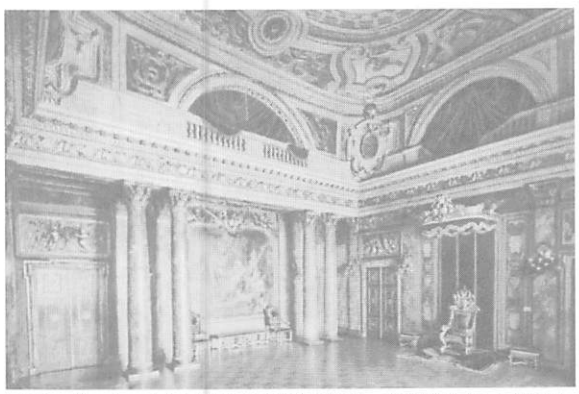
図17　ヴィルヘルムⅡ世亡命後博物館になった王宮のキャアピテル広間

Charlottenburg)正面に移築されている。旧西ベルリンで一番の繁華街はクアヒュルステンダム(Kurfürstendamm)と呼ばれているが、この大選帝侯にちなむものである。名前が長く発音しにくいので、一般にはクーダム(Kudamm)と呼ばれている。ベルリン王宮は1701年からプロイセン王国国王の1871年からはドイツ帝国国王の居城であった。1918年のドイツの第一次世界大戦での敗戦、それに伴うドイツ革命により最後のドイツ帝国皇帝ヴィルヘルムⅡ世がオランダに亡命して以来王宮は

図18　ベルリン王宮と手前の遊歩庭園

博物館として利用されてきた。図17は博物館として使用されていた時の王宮内部キャピテル広間(Kapitelsaal)の絵葉書である。

しかし1945年に英米軍の空爆を受け、王宮は焼失した。その廃墟は1950年に東ドイツ(ドイツ民主共和国)政府により撤去された。ドイツ再統一以来再建が提案され、2013年から再建工事が進められた。王宮の外観を復元し、新たな複合文化施設となった。そしてフンボルトフォーラム(Hunboltforum)と命名され、2020年12月に開館した。プロイセンの歴代の王はホーエンツオレン(Hohenzollern)家である。ホーエンツオレン家はシュッツトガルトを州都とするバーデン・ヴュルテンブルグ州にホーエンツオレン城を居城としていた一族である。従って今回のベルリン王宮の大修復工事はシュッツトガルトに本社を持つドイツの総合建設業チュプリン社(Ed. Züblin)が請け負った。図18はベルリン王宮とその前にある遊歩庭園である。ベルリンで一番の繁華街ウンター・デン・リンデンを東へ進むと、王宮のあたりで道路の名前がカール・リーブクネヒト通り(karl Liebknecht Str.)に変わる。リーブクネヒト(1871～1919)はドイツ革命のリーダーであった。恐らく東ベルリン時代に命名されたものであろう。ウンター・デン・リンデンの長さは1.4kmである。大選帝侯フリードリッヒ・ヴィルヘルム(1620～1688)がこの道路に菩提樹を植えさせたので、「菩提樹の下に」という意味で「ウンター・デン・リンデン」と名付けられた。歴代プロイセンの王は都市計画に力を入れた。丁度大道りの名前が変わったところの王宮の反対側にベルリンの大聖堂ドーム(Dom)がある。元来はホーエンツオレン家の宮廷教会、聖墳墓教会として建設され、王宮の前にあるだけに非常に権威のある聖堂である。図19が大聖堂、ドームである。これはプロイセン王、王妃の棺が安置された聖堂であった。Julius CarlとOtto Raschdorffの設計により1894～1905年に建設され、Günther Stahn、Bernhard Leiseringの手により、1975～93年に改修工事が行われた。

図19　ベルリンの大聖堂、ドーム

図20は大聖堂と宮殿橋の絵葉書である。図21は現在の大聖堂である。図22は博物館と前面の遊歩庭園である。Karl Friedrich Schinkelの設計で1822～23, 1825～30年に建設された。前面の18本のイオニア式列柱が特徴的である。博物館前の騎馬像は大選帝侯フリードリッヒ・ヴィルヘルムである。現在はこの騎馬像は撤去されている。博物館が建設されたのはフリードリッヒ・ヴィルヘルムⅢ世の治世時代でこの王は1910年に大学を創設している。文教関係に力を入れた国王とみられる。

シンケルはギリシャの古典建築を模倣した建物を多数残している。これは歴代のプロイセンの王がギリシャの古典建築を愛好したことによる。シンケル以外の当時の建築家もギリシャの古典建築を模した作品を残している。図23が現在の博物館と前面の遊歩庭園である。遊

図 20　大聖堂と宮殿橋

図 21　現在の大聖堂

図 22　博物館と前面の遊歩庭園

図 23　現在の博物館と遊歩庭園

図 24　ウンター・デン・リンデンとフリードリッヒ通りの交差点

図 25　国立オペラ座

歩庭園は市民の憩いの広場になっている。

フリードリッヒⅡ世は1722年に西プロイセンを併合し、プロイセン国王を名乗った。ポツダムにサンスシーという宮殿を作り、居住した。プロイセンは戦争には強かったが、粗野でもあった。そこでフランスの哲人ヴォルテールと親交を結び、フランス文化を取り入れた。サンスシーにヴォルテールを招き、啓蒙専制君主論を学んだ。その結果「国王は国民の下僕である」と公言し、国民のために尽くす政治を行った。国民に評判が良くフリードリッヒ大王と呼ばれ、慕われた。ベルリンにフリードリッヒ通り(Friedricstr.)と呼ぶ道路があり賑わっている。ここには地下鉄(U－Bahn)と高架鉄道(S－Bahn)の駅がある。東西ドイツに分かれていた時代には、ここに国境を超えるチェックポイントチャーリー(国境検問所)があった。いつも国境を超える人の長い列があった。フリードリッヒ通りとウンター・デン・リンデンの交差点はベルリンでも有数の繁華街である。図24はその交差点の絵葉書である。

図25はベルリンの国立オペラ座の絵葉書である。建築家Georg Wenzeslaus von Knobelsdorffの設計により

1741～43年にかけて建設された。1952～55年にかけて大改修が行われた。フリードリッヒII世(大王)の治政時代に建設された。大きな内部空間を持ち、当時としては画期的な建物であった。ベルリンのオペラというと三文オペラに代表されるブレヒトのオペラが有名であるが、ここでは専ら古典オペラが演じられた。ブレヒトのオペラはシッフバウアーダム劇場(Schiffbauerdamm Theater)という別の劇場で演じられた。この絵葉書の奥にあるドームの教会はベルリンでは珍しいカトリックの教会で、聖鞭打ち教会(St. Headwiegs−Kathedrale)と呼ばれる。Georg Wenzeslaus von Knobelsdorffの設計で1747～73年に建設され、1952～63年に大改修が行われた。キリストの鞭打ちの故事によるものである。ちなみにブルーノ・タウトの正妻はヘドヴィック(Hedwig)と言った。この名前はキリストの鞭打ちの故事によるものである。

4．ポツダム広場など

図26がポツダム広場(ポツダマープラッツ)の絵葉書である。当時のドイツ帝国鉄道(Reichsbahn)はここを起点としてドイツの地方都市への列車を運行していた。ベルリンのエスバーン(S－Bahn)と呼ぶ高架鉄道には東京の山手線のような環状線がある。ベルリンでは環状線の主要駅から地方へ向かう列車を運行していた。東京の山手線がベルリンの環状線に倣ったのである。ポツダム広場もベルリンの最も賑わった繁華街の一つであった。図27は現在のポツダマープラッツの写真である。地下鉄(U－Bahn)と高架鉄道(S－Bahn)の駅にもなっている。

図28はポツダム広場とライプチガー広場(ライピッチヒ広場)の交差点である。ここも最も賑わった場所の一つである。

図29はベルリン高架鉄道(S－Bahn)シェーンハウザーアレー駅の絵葉書である。駅名はシェーンハウザーアレーという大道路の名前から来ている。そして、この先はシェーンハウゼンに至る大道路という意味をしている。シェーンハウゼンにはプロイセンの王が住んだバロックの城がある。旧東独時代に東ドイツ大統領の居城となった。しかしその後大統領という制度は廃止された。図30は劇場の絵葉書である。Karl Friedrich SchinkelとK. Just Manfred Praserの設計により、1818～21、1919～84に建設と、大改修が行われた。フリードリッヒ・ヴィルヘルムIII世の治政時代に建設された。所在地はベルリン、ミッテのGendarmenmarktである。

図26　ポツダム広場

図27　現在のポツダマープラッツ(ポツダム広場)

図28　ポツダム広場とライプチガー広場(ライピッチヒ広場)の交差点

図31はオーバーバウマー橋の絵葉書である。この橋はシュプレー河にかかっている。ヒトラー政権は共産党を

図29　ベルリン高架鉄道(S-Bahn)のシェーンハウザーアレー駅

図30　劇場

図31　オーバーマウアー橋

図32　博物館島と国民画廊博物館島

嫌った。赤軍がシュプレー河から市内に入るのを恐れ、1945年にこの橋の橋脚を壊し、船舶の市内侵入を阻止した。

5．博物館島

図32は国民画廊の絵葉書を示す。ベルリン市内をシュプレー河がゆっくり流れていく。市内に中州(川中島)が出来ているが、そこに多くの博物館が建設されたことから「博物館島」と呼ばれている。ここにやはりギリシャ古典建築を模した国民画廊(ナチオナルギャラリー、National Galarie)が建っている。建築家Friedrich August Stüler, Johann Heinrich Strackの作品で、1862～64, 1866～76に建設された。ヴィルヘルムⅠ世の治政時代である。ビスマルクが活躍し、普仏戦争にも勝利し、ヴィルヘルムⅠ世は初代ドイツ皇帝となった。この国民画廊の最近の写真が図33である。

図34は博物館島にあるフリードリッヒⅢ世の博物館の絵葉書である。建築家Ernst von IhneとMax Hasakの設計により、1897～1904年の間に建設された。当時

図33　最近の国民画廊(ナチオナルギャラリー、National Galarie)

は建物の前にフリードリッヒⅢ世の銅像があったが現在は撤去され、博物館の名前もボーデ博物館(Bodemuseum)になっている。

6．おとぎ話の噴水

これまで紹介してきた絵葉書の建物は殆どベルリン市のミッテ(Mitte)地区に建っている建物である。最後に例外としてミッテ地区以外の建造物を紹介する。

図35におとぎ話の噴水の絵葉書を示す。Ludwig

図34　フリードリッヒⅢ世博物館(現在：ボーデ博物館)

Hoffmannの設計により、建設された。所在地をフリードリッヒスハイン(Friedrichshain)という。Hainは神域の森の意味である。「フリードリッヒ大王の神域の森」という意味である。少し大げさな名前であるが、ベルリン市民の憩いの場になっていることに間違いはない。

7．無線塔(フンクトゥルム)

この建造物もミッテ地区ではなく、シャロッテンブルグ(Charlottenburg)地区に建っている。

図36は国際見本市会場と無線塔の絵葉書である。Heinrich Straumerの設計により1924～26年に建設された。塔の高さは150mである。日本では早稲田大学建築学科教授であった内藤多仲博士が大阪の通天閣(1956年)、さっぽろテレビ塔(1957年)、東京タワー(1958年)を建設している。日本は地震国であるので、耐震設計が必要であった。内藤博士が設計した当時はコンピューターが実用化されておらず、タイガー計算機を使用した設計であった。ベルリンの無線塔は日本より30年前に建設されている。この塔を使用してラジオの放送が行われた。ヒトラーは得意の演説をラジオで行い、従来の街頭演説とは比べ物にならない勢力拡大の成果を上げた。ドイツは欧州の東西の中央、南北の中央である。それだけに多くの人が行き交い、交易に適した土地であった。そして昔から物々交換が行われ、それが発達して見本市となった。ベルリンの見本市会場は無線塔(フンクトゥルム)の下にある。

図35　フリードリッヒスハインにある「おとぎ話の噴水」

図36　国際見本市会場と無線塔

おわりに

ここに示した建物は皆立派なものである。ドイツ帝国時代のドイツ国民は豊かな生活を送っていたかというと、そうではなかった。画家でありイラストレーターであったハインリッヒ・チレ(Heinrich Zille)は貧しい労働者の生活を沢山描き、残している。森鴎外の私小説ともいえる「舞姫」はベルリンを舞台とした小説である。ヒロインのエリスは貧民窟に住んでいた。

謝辞

本文作成に当たり、絵葉書の提供を受けた上由美子さん、ドイツ帝国時代のベルリンに関する情報を頂いたドイツ国土交通省のOlaf Böttcher博士、バウハウスベルリン文書館の学芸員を長く務めたMagdalena Droste女史、駐日ドイツ大使館のBeate von der Osten女史に謝意を表する。

〈参考文献〉

1．Architekturführer „Berlin“ Dietrich Reimer Verlag Berlin
2．Die Chronik Berlins, Chronik Verlag 1991
3．Friedemann Bedürftig „Preußisches Lesebuch“ Unipart Verlag Stuttgart
4．Antonia meiners „Das Alte Berlin“ Nicolai
5．Tatsuaki Tanaka, An Illastrated History of the Berlin Worker Class From the Early Twentieth Cntury Untill the Time of Hitler, Through Drawings by Heinrich Zille, アマゾン電子書籍